Okukura Gyosen and Kanda Area on the Basis of Edo Natural History

HAGANO Fumiko

During the Edo period (1603-1868), natural history illustrations were developed to help people better understand flora and fauna.

Throughout the Edo period, first-rate painters, scholars, and amateur painters were involved in the production of natural history illustrations, and among them, Okukura Gyosen (?−1859/69), a natural history painter active in the late Edo period. Despite being the owner of a grocery store in Kanda, Edo, Okukura Gyosen dedicated his life to the creation of aquatic fauna illustrations.

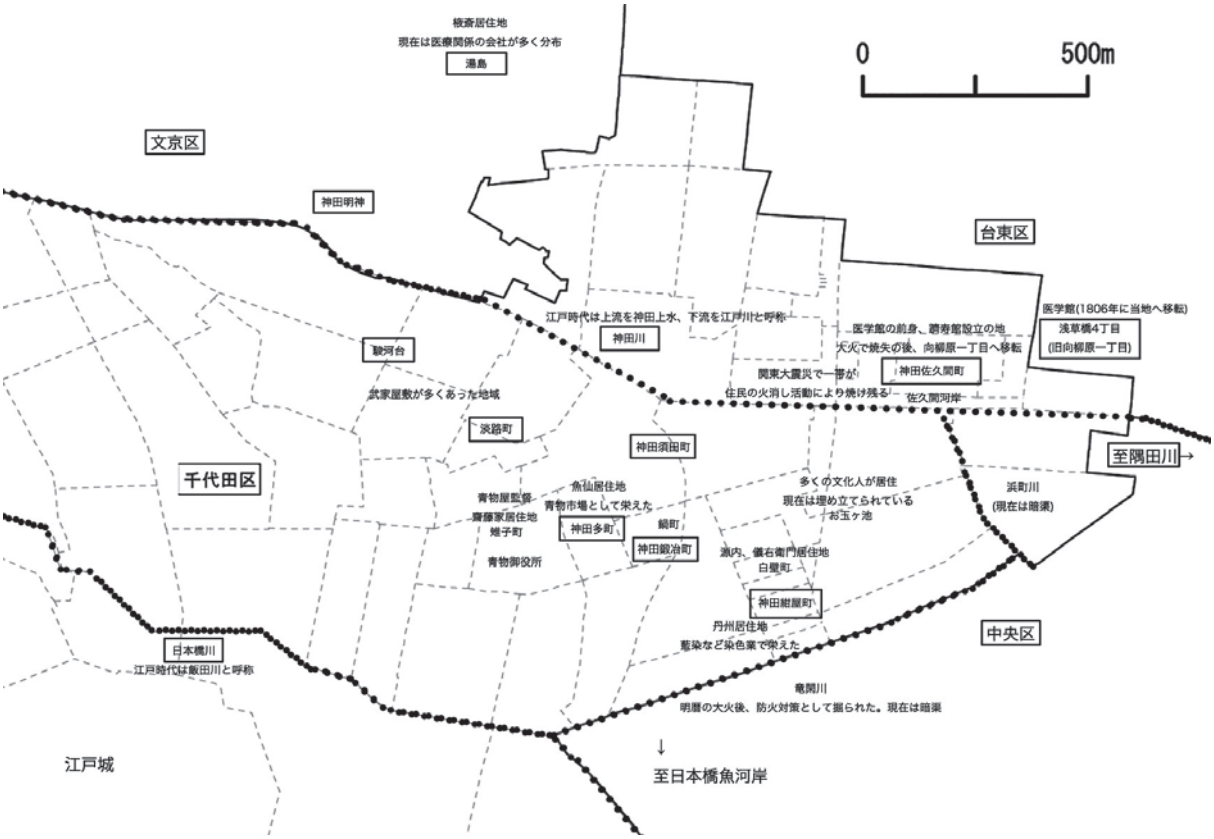
Gyosen's prolific output can be attributed to his unwavering commitment to rigorous research activities, as well as his close collaboration with and support of fellow painters and scholars living in the Kanda region.

This paper delves into the relationship between Gyosen and people engaged in natural history illustrations within the Kanda area. It explores the reality of Gyosen's production activities, which played a pivotal role in supporting natural history studies during the late Edo period. By examining the origins of the town of Kanda, characterized by its diverse population of varying statuses and occupations living closely together, this study sheds light on the unique environment that shaped Gyosen's contributions to the field.

江戸博物を支えたもの
—奥倉魚仙と神田—

波賀野　文　子　HAGANO Fumiko

巻頭付録「神田周辺地図」(筆者作成)
下の地図は、江戸末期の神田周辺を示したものである。
・江戸時代から現在にかけて残る町名及び現在の区名は黒線の囲み（ー）で表記した。
・川は点線（・・）で示した。



はじめに

生き物の形態を正確に描写し絵図に反映させる博物図譜は、人々が生き物をより理解するための一助として江戸時代において発展し続けてきた。特権階級が一流の絵師に描かせた豪華な図譜や、学者が研究のために作成した図譜など幅広い身分、立場の人々が図譜制作に関わってきたが、なかでも江戸時代末期に活動した博物絵師奥倉魚仙（生年不詳–1859/1869年）は、専門的な絵画教育を受けていない神田生まれの青物屋主人でありながら、水族に特化した図譜を生涯にわたり描き続けた異色の人物である。

魚仙が制作を続けることができた背景には、彼自

身の意欲的かつ継続的な水族研究があったことに加え、魚仙と同様神田の町に住まう、志を同じくする絵師や学者たちとの交流、援助があったことも理由として挙げられる。

魚仙が生きた当時の神田には、けして広くはない地域に武士や学者はもとより商人、町人、職人などさまざまな身分、職種の人々が集まり暮らしていたが、このような地域性と博物図譜の制作背景を関連づけた研究はこれまでほぼされてこなかった。

筆者は博士論文『奥倉魚仙の画業とその背景―オオサンショウウオを起点として―』にて魚仙の制作活動には神田の地の利に加えて身分を超えた人々との繋がりが大きな影響を与えていたと指摘したが[1]、魚仙を生涯突き動かした図譜制作への衝動はどのように条件づけられたり形成されてきたか――この疑問にさらに踏み込んだ考察をするためには、まずは彼を生んだ神田のまちの特色を精査することが魚仙研究に不可欠ではないかと判断した。

以上を踏まえ本稿では、身分や職業の異なる人々が身を寄せ合って暮らした神田の成り立ちと地域の特徴に鑑み、今までほとんど言及されることのなかった、神田周辺を拠点に活動した博物画制作に携わる人物の動向や魚仙との関わりに着目して、江戸末期の博物学を下支えした魚仙の制作活動の実態を探る。

まず第1章では、神田のまちがいかにして江戸屈指の賑やかで歴史あるまちとなったのか、その成り立ちと歴史的背景、そして魚仙の暮らした青物市場の誕生について言及する。

第2章では神田に多く集った文化人、すなわち学者や絵師などがなぜ神田に居を構えていたのか、代表的な人物を取り上げながらその要因について探る。

最後に第3章では、魚仙の神田での生活と活動は如何なるものだったのか、青物屋主人としての側面と博物絵師としての側面それぞれから、神田のまちと人々との関わりを検討する。

第1章　神田のまち

本章では、魚仙が生まれ育ったまち、江戸の神田[2]について取り上げる。魚仙が生きた江戸末期の神田は、幕府に質の高い野菜や果物を献上するほどに権勢を誇っていた青物市場をはじめ、鍛冶屋や鋳物屋などが集まった職人街が形成されるなど大いに活気のあるまちであった。

このことを踏まえ、そもそも神田が江戸時代を通じて栄え続けた要因は何処にあったのか、冒頭に示した地図と照らし合わせながら神田の成り立ちや商人、職人がまちに居を構えた背景を探る。

第1節　まちの成り立ち

現在、東京都千代田区の北東部の地区にあたる神田は、江戸時代以前は干潟が広がる沿岸部であった。貝塚の遺跡が見つかっていることからかつては漁労者が住んでいたと考えられている[3]。1590年に徳川家康が江戸城に入城、のちの江戸幕府誕生の過程で神田周辺は順次、市場や市街地として造成されていく。神田は江戸城から2キロほど東北に位置し、かつては平坦な土地で沼地が多い地域であったが、造成された大地に武家屋敷が設けられ、それと並行して低地を埋め立てた上に町人が住む区画も作られることとなった[4]。この大規模な造成により、神田は同時期に造成された日本橋と共に、江戸城下の下町として発展することとなる。

このように神田が江戸時代初期から造成、整備に着手されたのは江戸城からほど近いことが理由の一つとして考えられるが、江戸市中を流れていた古い神田川を隅田川につないで水害に備えるとともに、江戸城の北側の護りとするために堀割工事を進める必要があったことも大きな要因であろう[5]。新しい神田川は隅田川河口にあった江戸湊と内陸部を結ぶ重要な水路となり、水運の要として多くの人々や品物が行き交うこととなる。また、家康が江戸に入城した時に共に江戸へ従った摂州佃村の漁師などが神田や日本橋周辺に住んだことも[6]、この一帯が早くから江戸の中心的なまちとして栄えた一因となった。

ここで巻頭の地図を見ながら論考を進めていきたい。神田川の北岸に目を向けると、現在も町名が残る神田佐久間町がある。町名は佐久間平八という材木商が住んだことに由来し、江戸時代早期に家康が江戸築城の際に集めた駿河や三河、紀伊などの材木商が主に居を構え、商人や職人が多く集まった地域であった[7]。彼らは江戸時代を通じて、水運の利に恵まれた神田や日本橋で資材の供給という面から江戸の発展を支え続けた。

対して神田川の南岸、こちらも現在まで町名が残る神田多町には青物市場が存在した。神田多町は1657年の明暦の大火以降、今まで各町に散在していた青物屋がもともとこのまちにあった菜市を中心に集まったとされ[8]、周辺の神田須田町などと合わ

せて江戸随一の大きな青物市場として発展を遂げた【図１】。神田川沿いの河岸から荷揚げされた青物が界隈の約４万9500㎡に及ぶ市場で取引され、駒込や千住と並ぶ江戸三大市場の１つに数えられた[9]。

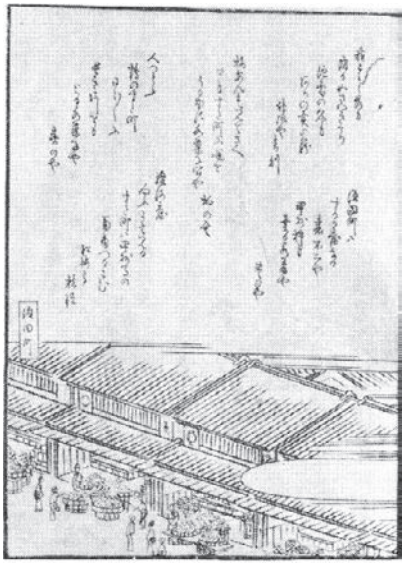


図１　須田町『神田市場史　上巻』

このほかにも、かつて藍染川が流れ江戸屈指の藍染の名産地として知られた神田紺屋町【図２】や、鍛冶町、鍋町、白壁町など住民の職業に関連する名前のついた町名がつけられており[10]、江戸時代は様々な職種の人々が神田に暮らしていたことが窺える。

図２　藍染川『江戸名所図絵　巻１』

第2節　青物市場、魚河岸の誕生

これまで指摘してきたように、神田は江戸幕府創成期よりまちが形作られ、早い段階で多くの商人、職人などが住んでいたことが大きな特徴と言える。本節では、魚仙の本業であった青物商が集った神田多町の青物市場の誕生背景、魚仙が足繁く通った魚河岸との関わりについて詳述していく。

青物市場

前節でも少々触れたが、神田多町の青物市場はまだ江戸が開きはじめたばかりの慶長年間に、河津五郎太夫という人物によって菜市が開かれたことから始まった[11]。巻頭の地図にも示したように北に神田川、南に飯田川（現在の日本橋川）という2つの川に挟まれた神田地域の土地柄は、何よりも鮮度が重要であった青物類を商う人々にとって、舟での荷上げや運搬等に欠かせないものであった。市場は発展を続け、1714年には幕府の青物御用を命ぜられることとなる。巨大な南瓜や新鮮な野菜を市場から幕府に献上するため、恭しく輿に載せられて運ばれていく様子が絵図にも残されている[12]。市場の表通りには店舗が軒を連ねており、裏通りには青物の行商人である棒手振りなどが長屋に住んでいた【図３】。

図３『神田市場史　上巻』

このように、江戸の御用市場として確固たる地位を築いた神田の青物市場は、魚仙が生きた江戸末期にはどのような商いをしていたのだろうか。例えば文久３年に伊勢屋長兵衛という人物が書き記した店舗の在庫品棚卸帳を見てみると、興味深いことに一つの問屋で扱っている商品は実に多種多様であることが分かる。伊勢屋の主力商品は長芋であったようだが、その他にもきのこ類、牛蒡などの土物、乾物まで揃えており、季節に応じて様々な商品を扱っていたようである[13]。また、多くの商品を扱っているものの単価が安い青物ゆえに、取り扱う金額は少なかったようである[14]。他方で、どの時代も必需品で

あった青物は時勢に左右されることなく常に一定の需要があったため、小さな問屋でも莫大な売り上げこそないものの堅実な商売を長くつづけることができたのであろう。魚仙の青物屋「甲賀屋」[15]もおそらく同様の商いをしていたものと考えられる。

魚河岸

神田の南、日本橋を中心に発展した魚河岸【図４】は、前述したように元々は江戸幕府開府の際に大阪の佃村から呼び寄せられた漁師が幕府に魚を納めたことが始まりとされる。漁師たちは幕府に献上した魚の残りを一般向けに日本橋で売り始め、これが魚河岸誕生へと繋がった。青物市場も魚河岸とほぼ同時期に形成され、水運が主だった青物輸送には魚河岸からの荷揚げも利用された[16]。

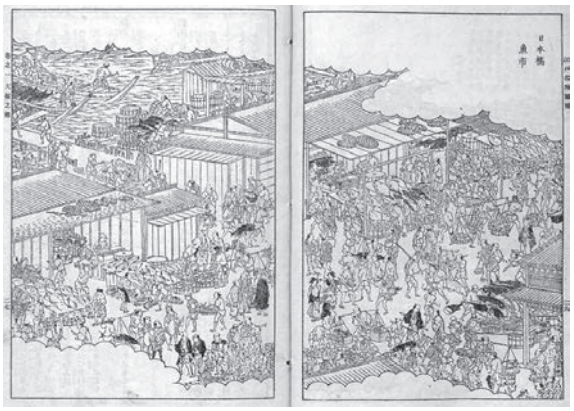


図４　日本橋魚市『江戸名所図絵　巻１』

青物商だった魚仙は、生まれ育った神田から程近く青物の商いに欠かせない魚河岸に、仕事の一環で足繁く通っていたと推察される。彼が少年期に画才を見出されたのち、魚の購入代を支援されて魚河岸に日参していた事実も、魚仙と神田の青物市場、日本橋魚河岸が密接に関わり合っていたからに他ならない。

第2章　文化人の集まり

これまで述べてきたように、神田は青物市場を中心に商人、職人が集まって発展を続けてきた。魚仙がそうであったように商いを生業とするもの、研ぎ師や鍛治職人など手に職を持つものが神田に多く住んでいたことは紛れもない事実であるが、他方で神田の北西方面に目を向けるとそこには武家屋敷が立ち並んでいた。また、神田川北岸の神田佐久間町に医学館があったことから[17]学者や医者も神田に居住しており、当時の知識人や文化人も神田の地に根ざして生活を送っていた。なぜ神田には商人や職人にとどまらず多くの人々が集ったのだろうか。

本章では、江戸時代の神田を代表する知識人がいかにこのまちで活動していたか例を挙げながら、彼らが神田に集まった要因は何かを探る。

第1節　神田に関わる代表的な人物

本節では、神田在住もしくは神田に深く関わり活躍した人物を列挙していく。

大久保家

まず、神田のまち作りに関わった人物として見逃すことができないのは、江戸の飲水としての神田上水の素地を作った神田在住の大久保忠行、通称主水（?-1617）である。元は武士であり、怪我により槍仕事ができなくなった後は家康の菓子司として仕えていた大久保は、家康の関東移封に伴い江戸へと移った。

江戸開府当時の下町は、土地の低さゆえに海水が満ちており飲用には不向きであったため、江戸の民を支えるために良質な飲用水の確保が急務であった。大久保は用水工事を命ぜられ、井の頭（現在の井の頭恩賜公園）の湧水を、土地の高低差を利用して神田方面に流し、小石川上水を完成させた[18]。のちに拡張されて神田上水となり、明治34年に廃止されるまで重要な水道であり続けた。江戸時代初めに潤沢な水源を確保し江戸市中に分配するシステムを作り上げた大久保の子孫は代々主水を名乗り、幕府御用達の菓子司となった[19]。

齋藤家

大久保と同じく家康の関東移封当初から神田雉子町に居を構え、名主として神田青物市場の監督と上納を担当した齋藤一族も、神田の歴史に足跡を刻むこととなる。7代目当主幸雄は、当時京都で『都名所図絵』が刊行されたことをきっかけに江戸にも同様の図絵が必要であると考え、仕事以外の時間を江戸府内、府外の調査に割いて『江戸名所図絵』を編纂した[20]。齋藤家は幸雄から3代にわたって刊行に向けた編纂を続け、『江戸名所図絵』は制作が始まって50年ほどでようやく完成し、1833年から36年にかけて刊行された。この時に図絵の挿絵を担当したのが絵師の長谷川雪旦（1778-1843）、雪堤（1813-82）親子である。

この『江戸名所図絵』の制作、刊行時期は魚仙が神田多町で青物屋を営みながら画業に勤しんでいた

時期と重なることから、魚仙が神田青物市場を監督していた齋藤家を介して長谷川親子とも面識があった可能性も否定できない。決して広くはない神田のまちで、青物屋主人でありながら図譜を制作していた魚仙はおそらく地域でもよく知られた特異な人物であっただろう。このことから、魚仙が長谷川家と接点を持ち、直接絵図を見せてもらうなど何らかの交流があった可能性も十分に考えられる。

駿河台狩野家

神田の西、駿河台に居を構えて神田の画壇の中心にいたのは狩野家である。開祖は狩野益信（洞雲1625-94）で、狩野探幽の弟子として画才を見出され、のちに探幽の養子となる。4代目の美信（洞春1747-97）は幕府御用絵師として探幽の画法を踏襲しながら制作活動を続け、その画風は「駿河台風」と呼ばれたという[21]。幕命を受けて朝鮮国王へ献じる屏風を制作、浅草観音堂へ奉納する天女図を描くなど活躍した。狩野家の前の坂は観音坂と呼ばれるようになり、駿河台から淡路町にかかる短く緩やかな坂として現在も名を残している[22]。

多紀家

神田には、当時名の知られた学者や医師が多く居住していたことも大きな特徴として挙げられる。中でも神田在住の多紀氏は、1791年神田佐久間町に医学館（前身は躋寿館）を創設し、多紀一族はもちろんのこと優れた町医や学者を招聘して医学の講義を行った[23]。当時著名だった本草学者の田村藍水（1718-76）は、1763年にそれまでの功績により幕府医官に取り立てられ、医学館で指導に当たった。次男である栗本丹州（1756-1834）も医学館で本草学を教える傍ら、博物図譜を通じて魚仙と交流を持つことになる。

なお、藍水の門人である平賀源内（1728-79）も開催に深く関わった、日本各地より珍しい動植物などを一堂に集めた「薬品会」が1757年に初めて開催されている[24]。

高田家

8代将軍吉宗が江戸に入府した時期を同じくして神田に居を構え、代々学者を輩出した名家であった高田家は、江戸の農地、新田の開墾事業に携わることとなる[25]。また、幕府が手がけた見沼代用水の難工事に協力したことで用水路の通船を許可され、神田佐久間町付近にあった「神田通船屋敷」と呼ばれた邸宅に代々高田家が居住した[26]。高田家からは、賀茂真淵の孫弟子で国学者の大家の1人に数えられる6代目高田興清や、早稲田大学を創立した9代目高田早苗（1860-1938）などを輩出した。

平賀源内

発明家や文学者として名を馳せた源内は讃岐出身で、江戸に出てきた当初居を構えたのは神田白壁町であった。前述したように、本草学者で医官であった藍水の門人となり、物産学を学ぶ。

中川儀右衛門（1763-1830）

源内の発明家としての側面を受け継いだような人物ものちの世代に登場した。京都生まれの中川は1804年ごろ江戸に下り、源内と同じく神田白壁町に居住した。中川は製紙家として活動し、当時中国から輸入されていた唐紙をもとに和唐紙を作り上げた[27]。ほかにも縦18m、横9mもの大きさの紙、石油ランプ、源内の創製した火浣布（石綿を混ぜて織った不燃性の布）の作成など、神田の地で多くの発明を生んだ。

浮世絵師

西村重長（1697?-1756）はもとは日本橋の出であったが晩年神田に古本屋を開く。自身は役者絵や美人画、名所絵など多彩な作品を手がけた。その画業は後の鈴木春信に影響を与えることとなる。北尾重政（1739-1820）は本の挿絵を多く手がけ、菱田春草、葛飾北斎、喜多川歌麿などが北尾の教えを受けたという[28]。中でも、この北尾の門人であった鍬形蕙斎（1764-1824）は、神田のお玉ヶ池に居を構え、神田明神に江戸絵図の絵馬額を奉納した。鍬形は、1794年に市井出身者としては異例の津山藩松平侯の御用絵師に任ぜられるなど活躍した[29]。

お玉ヶ池周辺の人々

これまで挙げてきた神田ゆかりの人物に加え、興味深いのは当時神田の東側にあったお玉ヶ池周辺に多種多様な身分、職業の人物が住んでいたことである。

お玉ヶ池は江戸初期には不忍池と同じ規模だったとされる池で、徐々に埋め立てられて江戸末期にはかなり小さくなっていたようである[30]。池の周辺には、前述した鍬形や1839年に私塾を構えた若き日の佐久間象山（1811-64）のように[31]、当時を代表する絵師、書家、儒者、志士、剣聖、戯作者など[32]多く

の文化人[33]が住み、神田の文化の中心地であった。

第2節　集まった要因

上記のように、神田には数多くの文化人、知識人たちが住んでいた。彼らが神田に集中したのはなぜだったのか、考えられる要因を述べることとする。

江戸造成初期からある古い町

前章でも言及したように、神田は元は土地の低い湿地帯であった。家康が江戸に移ったのち、江戸が発展するに従い増えた人口の受け皿として江戸城の東側の神田、日本橋の一帯が埋め立てられて市街地へと変貌していった。神田は日本橋と共に江戸の工業、商業の中心として発展する。すなわち神田は江戸造成の最初期に作られた屈指の歴史を持つまちなのである。それに加え、神田明神の存在も神田にとって欠かせないものであった。730年創建とされる古社で、家康が関ヶ原の戦い前に戦勝祈願を行ったことでも知られる[34]。1616年には江戸城の表鬼門守護のため神田川の北岸へ移り、江戸時代を通じて江戸総鎮守として崇敬された。なお、江戸時代から始まり現在も隔年で開催されている神田明神の祭礼神田祭は、幕府公認の祭りとして江戸城内まで祭礼行列が練り歩くことを許されており、江戸の民から「天下祭」と呼ばれ親しまれた[35]。

このように、江戸時代において歴史のあるまちとして早期から人々が居住したことに加え、江戸随一の古社である神田明神が地域に根ざしていたことで、神田には幕府御用達の商人や職人、神田明神への参拝客が集い、大いに賑わっていたのではないだろうか。

江戸開府と同時に移り住んだ一族の多さ

第1章でも述べたように、青物屋始祖の河津氏や魚河岸の佃氏をはじめ、神田周辺には江戸幕府開府に前後して地方から移住してきた一族が多かった。彼らが移住した当時の江戸はまちづくりの途上にあり、家康は全国各地から有能な商人や職人を招聘して江戸城下の整備に当たった。一族郎党江戸へ移住した彼らはやがて江戸初期に作られたまち神田へ腰を据え、その多くは幕府御用達として商いを続けていったのではないかと推察される。

地理的特徴

神田の地理的な特徴として特筆すべきは、何より江戸城が近いことである。神田と江戸城は距離にして2キロもない位置関係であり水運も発達していたことから、青物屋や菓子司などの商人たちにとっても新鮮な食品を江戸城に収めるには交通至便な地域であったと考えられる。また、神田佐久間町の医学館で教鞭をとった学者や医者は幕府の医官など重要な立場を担っていたことから、距離が近く江戸城に日参しやすい神田は申し分のない立地であっただろう。多種多様な人々が集った神田は当時の文化人たちにとっても刺激を得られるまちだったのではないだろうか。

第3章　魚仙と神田

これまで神田のまちの成り立ち、そこに関わる人々に言及してきたが、これまでの考察を踏まえて改めて魚仙と神田のまち、人々がどのように関わり合いながら魚仙の画業に繋がっていったのかを、魚仙の青物屋主人として、博物絵師としての2つの側面から検討する。

第1節　神田の町との関わり

青物屋主人として

魚仙は神田多町2丁目にて、青物屋甲賀屋長右衛門として生活の糧を得ていた。実際のところは妹に経営を任せ、魚仙本人は日々日本橋魚河岸に通って魚を購入し、図譜作成のため写生に勤しんでいたようである[36]。ここで天保年間（1831-45）に作成された神田地図【図５】の中央を見てみると、青物市場の中心だった多町2丁目の通りの幅は四間四分（約8メートル）と記されている。周辺の通りがおよそ四間から五間だったことから、青物市場は平均的な広さをもった通りを有していたと思われる。多町は江戸屈指の青物市場として通りが人でごった返すほどの賑わいを見せていたのだろう[37]。

図５　神田東部の図（一部抜粋）『神田市場史　上巻』
地図右上のアミガケ部分には「青物御役所」とある。

このような環境で生まれ育った魚仙は、後年店を妹に任せていたとはいえ、幼少期は先代の仕事を手伝ったり、同業者や客と接する機会もあったはずである。このまちで培われた魚仙の商売人としてのコミュニケーション力が、後述する交友関係の広がりの一助となったと推察されるのである。

博物絵師として

拙論でも述べたように、魚仙は幼少期に湯島在住の書誌学者狩谷棭斎に画才を見出されて以降、魚の購入費の支援を受けながら水族の図譜作成に励む日々を送っていた。魚仙は棭斎と出会う前から魚屋の軒先など方々で絵を描いていたというから、彼の生活圏には子供でも出かけられる狭い範囲に写生に適した環境が充実していたのであろう。日本橋にも湯島にも近かった神田に住んでいたからこそ、棭斎との出会いや魚河岸への日参、写生できる機会が得られたのだと考えられる。

第2節　人々との関わり

青物屋主人として

江戸の伝統あるまち神田、その中でもとりわけ神田の中心的商業地であった青物市場の一角で生涯を過ごした魚仙は、おそらくは神田への愛着や誇りを少なからず抱いていたのではないだろうか。魚仙が生きた江戸末期から60年ほど後、1923年の関東大震災では東京の下町が軒並み火災に襲われ灰燼に帰す中、神田和泉町と神田佐久間町一帯の住民はまず女性や老人、子供たちを避難させた上で、残った住民総出で火消しのバケツリレーを行い、地域の延焼を免れたという[38]。これには神田川がすぐ近くにあり水には困らなかったことや、風向きなどいくつかの幸運が重なったことも火消しが成功した要因の一つではあるが、何よりも神田の住民が自分たちのまちを何が何でも守るという決死の覚悟を持って火消しに当たったことが大きいのではないか。

このような人々と同様、粋で人情にあつい江戸っ子[39]、神田っ子であることに誇りを持ち日々を過ごしていたであろう魚仙は、青物屋主人としても客や同業者と密接に関わり合いながら日常的に多くの人と交流する機会があったと思われる。魚仙の神田で築いた人脈をもっては青物屋監督の齋藤家ともおそらくは面識があり、そこを起点に画家の長谷川親子へと繋がっていった可能性もある。

博物絵師として

魚仙がその生涯を捧げたと言っても過言ではない水族図譜の制作において、やはり人々との交流は欠かせないものであった。彼の人脈は、前述した棭斎を皮切りに、医学館教授方で幕府奥医師の栗本丹州など本草学界隈のスペシャリストへ繋がっていった。丹州とはおそらくは親子ほど年齢が離れていたと思われるが、神田多町、神田紺屋町と近かった互いの家を行き来し、図譜を見せ合うなど良好な交友関係を築いていたようである[40]。魚仙の図譜には丹州の図譜からの転写も見られ、合作もあることなどから[41]、丹州が魚仙の図譜制作に多大な影響を及ぼしたことは間違いない。その後、丹州の後を継いで奥医師となった栗本鋤雲（1822-97）は魚仙から水族について師事を受ける[42]など、栗本家と魚仙の交流は終生続くこととなった。

また、神田佐久間町にて医学館設立に携わった多紀家の人々との関わりも見逃せない。魚仙の生涯で唯一の刊行に至った『水族写真　鯛部』では、多紀元堅（1795-1857）が奥書を寄せる[43]など少なからず面識はあったように思われる。棭斎の紹介で魚仙が親しく交流した森立之（1807-85）が棭斎の門人かつ元堅の門人でもあったことから、魚仙は立之を介して多紀家の人々とも関わりを持つことができたのだと考えられる。

加えて、当時神田に多く居住した文化人の存在も魚仙にとって大きいものであっただろう。浮世絵師や狩野家など当時名の知られた絵師が神田に居を構えて活動していたことや、源内や儀右衛門といったいわば「近所に住む変わった面白いおじさん」のような人物の存在が神田のまちに多様性を生んでいた。魚仙がこれらの人物と交流があったかどうかは、残された資料がなく確証は現時点では得られないが、現代社会と比べて間違いなく人々との交友が密接であったであろう江戸において、魚仙が上記のような人物が生み出した作品に触れ、刺激を受ける機会を有していた可能性は大いに考えられるのである。

おわりに

本論では、江戸末期の神田にて生まれ育った博物絵師奥倉魚仙の活動の背景や彼に関わった人物を精査することで、身分や職業の異なる人々が身を寄せ合って暮らした神田の成り立ちと地域の特色を踏まえた上で、今までほとんど言及されることのなかった神田周辺を拠点に活動した博物画制作に関わる人物の

動向や魚仙との交友関係に着目し、江戸末期の博物学を下支えした魚仙の制作活動の実態を探ってきた。

江戸幕府創成期から商人や職人、武士などが作り上げてきた神田は、江戸城からほど近い立地の良さと南北を川に挟まれた水運の利をもって、江戸随一の青物市場や商業地、職人街を有するまちとして発展を遂げてきた。家康入府と時を同じくして江戸に移住した人々が神田に住まい、幕府御用達の商人、職人としての立場を早くに確立したこと、勝負事のご利益が得られるとして江戸の人々から崇敬された神田明神が地域に根ざし多くの人々の往来があったこと、この事実が江戸時代を通じて神田が発展したことに寄与したと考えられる。

また、関東大震災以前まで神田にあった青物市場は、江戸3大市場として大いに賑わい栄えた。そんな青物市場の主人として日々暮らした魚仙は、青物屋主人として、また市井の博物絵師として多くの人々と交流し、人からまた人へとその人脈を広げていった。魚仙が生きた江戸末期は、それまで一部の特権階級の学術的探究心から作られ、限られた人物の目に触れるだけであった博物図譜が、転写や出版を重ねて一般庶民にも流布されていった時代でもあった[44]。だが、当時博物図譜に携わっていた人々の多くは以前と変わらず知識人、いわゆる本草学者や医師、大名や旗本など社会的地位の高い人物のままであったのもまた事実であった。その中で一介の青物屋にすぎなかった魚仙が図譜制作に終生取り組むことができたのは、何よりも神田に居住していたことと、彼の人脈の広さが大きな理由として挙げられる。

これまで述べてきたように、神田の成り立ちと立地の利点は魚仙の活動にも良い影響を及ぼしたと考えられる。まず日本橋魚河岸が自宅から程近かったこと、椄斎や丹州、立之など魚仙の画業を支えた人物が神田周辺に居住または医学館に職を得ていたことが、魚仙の図譜制作において大いに力になっていたのではないだろうか。魚仙が身分や立場を超えてこれだけの人脈を築き、今日まで残る優れた図譜を完成させた要因は、何よりも魚仙自身の人としての性質であろう。社会的立場が決して高くない魚仙がただ絵が上手い青物屋主人として生涯を終えることがなかったのは、彼自身が神田で培った、多くの人々と交流し対話する力を有していたからに他ならない。魚仙の人柄と真摯な図譜制作活動に魅了された人々が彼を支援し、交流を深めたことで他に類を見ない水族図譜の完成に至ったのである。江戸末期の博物図譜を下支えした奥倉魚仙、その制作活動の素地には、神田のまちが有する歴史と多様な人々を受け入れる懐の深さがあった。

本論では魚仙の制作実態と神田との繋がりを、地域の特色と人々との関わり、すなわち社会環境からある程度導き出すことが出来た。しかし他方で、魚仙の生涯を知ることができる文献の少なさゆえに、確固たる証拠なくほぼ推論の積み重ねで論じることの難しさを痛感した。とはいえ、魚仙を論じるにあたり彼の周辺に散らばる事象を一つ一つ拾い上げて集積していったことで、江戸末期の博物学界隈には常に江戸の中心地、すなわち神田周辺が深く関わっていることはまごうことなき事実であると確信に至った。

今後の研究では、魚仙が画題として生涯追い続けた水族、主に魚が江戸時代に人々とどのように関わっていたのか、食べるだけにとどまらない魚と江戸の人を巡る文化の背景を調査課題としたい。

脚注

1 魚仙の画業については拙論にて詳述している。博士論文『奥倉魚仙の画業とその背景―オオサンショウウオを起点として―』2021年度、京都精華大学。本文中にて言及する場合は「拙論」と表記する。

2 本論での江戸の範囲は、1818（文政元）年の『江戸朱引図』が示す範囲を基準としている。なお、現代の東京23区名で示すところの千代田、中央、江東、隅田川、台東、文京、新宿、渋谷、港、大田が当時の江戸の範囲にあたる。また、江戸期の神田の範囲は神田橋を挟んで東の地域で、神田川を挟んで　外神田と内神田、神田大通りで東神田と西神田に分かれていた。
千代田区ホームページ「iii. 神田地域」https://www.city.chiyoda.lg.jp>guideline-3_1　2023年9月20日 最 終閲覧。

3 中村薫『神田文化史』神田史蹟研究会、1935年、3頁。

4 『神田市場史上巻』神田市場協会神田市場史刊行会、1968年、8頁。

5 中村前掲書、6頁。

6 川崎房五郎『江戸わがふるさと』ぎょうせい、1980年、55頁。

7 『神田市場史上巻』神田市場協会神田市場史刊行会、1968年、168頁。

8 同上、174～175頁。

9 阿部猛、落合功、谷本雅之、浅井良夫編「郷土史体系『生産・流通（上）』農業、林業、水産業」2020年、96頁。

10 『神田市場史上巻』神田市場協会神田市場史刊行会、

1968年、13頁。

[11] 中村前掲書、207頁。

[12] 東陽堂『風俗画報』176、1898年、２頁～４頁。

[13] 『神田市場史上巻』神田市場協会神田市場史刊行会、1968年、149頁。

[14] 同上。

[15] 甲賀屋の系譜は徳川中期から昭和30年代まで確認することができる。欄外には『安政六年（巳未）八月、多町二丁目青物業甲賀屋長右衛門没す、自著「鯛譜」二巻あり』と魚仙についての記述がある。　同上、169頁。

[16] 阿部、落合、谷本、浅井前掲書、96頁。

[17] 医学館は1806年に近隣の向柳原一丁目へ移転することとなる。中村前掲書、83頁。

[18] 東京都水道歴史館「2 江戸における上水の始まり」https://www.suidorekishi.jp/pdf/s_history_2.pdf 2023年９月10日最終閲覧

[19] 虎屋「歴史上の人物と和菓子『大久保藤五郎と三河餅』」https://www.toraya-group.co.jp/corporate/bunko/historical-personage/bunko-historical-personage-093 2023年9月20日最終閲覧

[20] 中村前掲書、27頁～29頁。

[21] 同上、144頁。

[22] 同上、145頁。

[23] 同上、82頁。

[24] 大人の科学.net「江戸の科学者列伝　平賀源内　科学技術社会を先取りした江戸の自由人」https://otonanokagaku.net/issue/edo/vol4/index03.html 2023年9月20日最終閲覧

[25] 中村前掲書、89頁。

[26] 同上、90頁。

[27] 同上、95頁。

[28] 同上、146～147頁。

[29] 同上、147～148頁。

[30] 1858（安政５）年には、伊藤玄朴ら江戸の蘭学者たち82名が資金を出し合い、池のほとりに「種痘所」を作ったことでも知られる。
千代田区観光協会https://visit-chiyoda.tokyo/app/spot/detail/43
2023年9月18日最終閲覧

[31] 中村前掲書、152頁。

[32] 同上、145頁。

[33] ここでいう文化人は、「文化的教養を身につけた社会人。特に、学問、芸術など知的な職業をもつ人。」を指す。『精選版 日本国語大辞典参照』参照。

[34] 全国家康公ネットワーク「神田明神」http://www.ieyasu-net.com/shiseki/tokyo/05chiyodaku/0003.html　2023年9月21日最終閲覧

[35] 神田祭「神田祭の歴史　江戸時代の神田祭」https://www.kandamyoujin.or.jp/kandamatsuri/about/　2023年9月1日最終閲覧

[36] 松井魁「水族写真と著者奥倉辰行（魚仙）の生涯とその業績」『宇部短期大学学術報告』19、1983年、34頁。

[37] 明治期の青物市場について、かつての青物屋が語った当時の様相を窺い知ることのできる興味深い証言が残る。以下抜粋。『朝から夜までの商売ですから、入り口に関門といって木の塀をこしらえまして、外から車を入れないようにして営業するわけです。下手にあそこに入ってきた巡査なんか「出たッ」でみんなしてブンなぐって、帽子も何もふっ飛んでいっちゃうのですけれども、朝のうちから入ってこないことになっている。一個の団体組織になっておりまして、よく気がそろったものですよ。』
東京都千代田区『明治百年を語る古老のつどい』1969年、122頁～124頁。

[38] 日本損害保険協会『そんぽ予防時報：リスク情報専門誌』（185）、1996年、２頁。

[39] 江戸っ子がどのような人物を指すかは様々な捉え方があるが、概ね下記のような江戸で生まれ育った人物像を示す。「江戸っ子」という言葉が登場するのは意外にも遅く、江戸中期の18世紀後半からである。
「都市江戸で生まれ育った，きっすいの江戸の人の意。根生いの江戸住民 であることを自負・強調する際に多く用いられた。それも武士ではなく、おもに町人の場合である。江戸っ子は、物事にこだわらず金ばなれがよく、意地と張りを本領とし正義感が強かったが、反面、けんかっ早くて軽率だといわれた。江戸っ子といった場合、江戸者、江戸生れ、江戸人、江戸衆などというより、もっと根生いの江戸住民であることを強調する言葉としての響きが強い。」『改訂新版・世界大百科事典』参照。

[40] 松井前掲書、35頁。

[41] 国立国会図書館デジタルコレクション「異魚図纂・勢海百鱗」https://dl.ndl.go.jp/pid/1287414

[42] 松井前掲書、35頁。

[43] 同上、35頁。

[44] 下記資料に、江戸時代に図譜制作を担った人々が身分や立場ごとに詳しく示されている。朝日新聞社『江戸の動植物図　知られざる真写の世界』1988年、158頁～161頁。